



文学者

フリーライター

小沢 信行 (おざわ のぶゆき)

1978年北海道新聞社に入社。記者として函館、釧路、小樽などで勤務。編集委員、論説委員などを務め2017年退職。日本森林インストラクター協会会員。道新文化センターで樹木観察の講師を務める。

日本のプロレタリア文学を代表する作家小林多喜二は10代のころ、有島武郎の作品に大きな影響を受けます。創作活動を始めた小樽商業学校（後の小樽商業高校、2020年閉校）時代には、武郎の小説「生まれ出づる悩み」をまね「生まれ出づる子ら」という個人誌を出すほどでした。2人とも北海道生まれではありませんが、多喜二は社会人になるまで小樽で育ち、武郎はニセコの農場を解放したことで、地元の人々に強い印象を与えました。

小林多喜二 胸像の予定がレリーフに

小林多喜二は秋田県で生まれ4歳の時、家族とともに小樽へ転居しました。その後、小樽高等商業学校（現小樽商科大学）へ進学し、北海道拓殖銀行に就職した1924年以降も創作活動は続き、プロレタリア文学に傾注します。1929年には、北洋漁業に携わる労働者の実態を描写した「蟹工船」、小作農民を題材にした「不在地主」を発表します。

しかし、銀行から解雇され1930年に上京。共産党に入党し、非合法下の活動を続けますが1933年、特高警察に逮捕され、虐殺されます。29歳の若さでした。

苦難の資金集め

非業の死を遂げた多喜二の文学碑を建てる声は1960年ごろから小樽市内で上がり、1961年5月1日には、メーデーに参加した労働者たちが文学碑の建立を決議します。でも、具体的な活動には発展しませんでした。

主義や立場を超えて協力しようと小樽地区労働組合会議のメンバーや小樽商科大学の教官が中心となり1963年12月、小林多喜二碑建設期成会が発足します。

発起人代表は小樽市長の安達与五郎、小樽商科大学長の加茂儀一ら4人。発起人127人の中には志賀直哉、石川達三、伊藤整、亀井勝一郎らの文学者もいました。事務局は小樽商大に置き、同大教授の浜林正夫が事務局長を務めました。

1965年のメーデーに除幕式を行う予定で、碑の設計は札幌出身で東京在住の本郷新に依頼。1964年春には、建設場所を小樽の港と市街地を一望する旭展望台裏手の市有地とすることが決まります。

同年3月の建設趣意書で掲げた募金目標は400万円。札幌、東京、京都などにも協力会を設け、全国的な態勢を構築しました。ところが、1年経って集まったのは100万円ほど。経費を切り詰め目標額を360万円程度にしたものの、その半分にも達していません。特に、全体の3分の1を目標にしていた東京は20万円止まり。当然、除幕式は延期せざるを得ません。

窮状を打開するため、小樽商大の同窓会誌「緑丘」42号（1965年3月31日）は「小林多喜二特集」を組み、卒業生に寄付を呼び掛けます。この特集には、多喜二の1年後輩の伊藤整が書いた「お願い」が掲載されました。

伊藤は観光目的で文学碑があちこちに建つのは好ましくないと考えていましたが、「この記念碑に限って

は何とかして実現にまで運んで頂きたいと、心から願っている」と訴えます。

その理由として「多喜二は郷里小樽においては政治的文学者として扱われるべき人ではなく、小樽の生み出した稀有の才を持った文学の人間として、もっと市民一般に近づけられるべきだ」というのです。そして「どの人も具体的な事情は語らないが、地元にある種の抵抗があることが私にも分かってきた」と厳しい現実を吐露しています。

思い悩む製作者

一方、本郷の設計も難航します。1964年9月の段階で本郷が関係者に示したのは、登別硬石を積み重ねた壁を据え、壁の一部を裏側までくり抜いてそこに多喜二の胸像を設置する計画でした。

ところが、本郷はそれに満足していませんでした。かつて多喜二と活動をともにした人物へあてた手紙(1965年3月4日付)が小樽文学館に残っています。そこには「やっと、これならばと思われる案」がまとまったと書いています。

それによると、石は不定形なものを積み、表面はざらざらに仕上げ、壁の所々に穴をあけ空気を通します。そして左側に多喜二の頭像を置きます。胸像は頭像になったものの、多喜二の立体像を作ることに変わりはありません。

しかし、1965年5月28日に行われた起工式で明らかにされた最終案は、多喜二像が労働者像に差し代わっていたのです。壁は2枚に分け、本を左右に広げたような形にしました。

左側の壁には労働者像を配置し、その上に北極星と北斗七星をかたどった穴をあけます。右側の壁は右上端に多喜二のレリーフを掲げ、中央上部に「小林多喜二文学碑」の文字、その下には知人にあてた手紙の一節を掲示します。

本郷は3月に手紙を出した後も、さらに思い悩んでいたこととなります。大胆な変更を決意したことについて、地元のタウン誌で次のように説明しています。

「多喜二は働く人々の幸福を求めて立ち、それ故に命を奪われた文学者であるから、私はこの文学碑の中に、一人の働く若者の頭像を中心的な像としてはめこむことにした。そうすることで、この文学碑を他の文学碑と区別する一つの手がかりとした」

碑の主役はあくまでも多喜二のはずです。「普通なら肖像を第一義にするのが常識であろう。石の壁を作るなら、その中央に多喜二の像を据えるであろう。私は敢えてこれを避けた」と言い切っています。

本郷は労働者像を制作するため、小樽の港湾地区を3日間にわたって歩き回り、何人かの顔を参考にし、自分のイメージに合った顔を作り上げました。その頭像はずっしりとした肉付きのいい顔立ちで、不屈な強い意志を感じさせます。

文学碑の除幕式は当初予定より5カ月遅れ、1965年10月9日に行われました。高さ4.5m、幅6mの碑は赤い幕で覆われ、それを多喜二の姉の孫娘が引き下ろしました。



本を広げた形の小林多喜二文学碑



労働者の頭像

碑に込めた小樽愛

碑に刻まれた多喜二の書簡には、小樽の街を「ほくはどんなに愛しているか分からない」と記されています。伊藤が危惧していた市民の政治的アレルギーを和らげるためにも、多喜二の小樽愛が色濃い文章が必要だったのでしょう。

募金を求める期成会の冊子には「多喜二は小樽の街を限りなく愛した。そして多喜二の場合、それが単に育った土地とか、自然とかという郷土的なものへの愛着としてではなく、そこに働く人間への共感ということとつよく結びついていた」と書かれています。

浜林の執筆と思われるこの解説に従えば、労働者像をメインにすることは、多喜二の小樽愛をより鮮明にすることになります。碑全体を俯瞰すると、多喜二が天上から労働者に温かい視線を送るようにも見えてきます。

本郷は「期成会の人々が、私に自由な発想を許してくれた。これは作者として得難い喜びであった。世間には、記念碑を建てる時、そこに集った発起人たちが、造型に『注文』をつけることがよくあるが、その注文に従えば従う程、作品たる記念碑は駄作になりがちなものである」と感謝しています。



多喜二のレリーフ

最終的に総事業費は、浜林らの努力で300万円にまで切り詰めることができました。それでも結局、集まった募金は目標額に10万円届きませんでした。本郷への支払いも分割が続き、除幕式までには終わりませんでした。

「制作者の本郷新氏に大へんな御迷惑をかけたばかりでなく、除幕式のあとでもたれた『多喜二を偲ぶ懇談会』の内容を記事にして、これに会計報告と碑の写真をつけた小冊子をつくらうという計画が、原稿ができあがっているにもかかわらず、資金的に不可能になってしまった」ことが「心残り」だと浜林は回顧しています。

有島武郎 記念公園のシンボルとして

東京生まれの有島武郎は札幌農学校(現北海道大学)に進み、卒業後は米国留学をへて、母校で教鞭をとりました。その後、上京し本格的な創作活動に入ります。

ニセコとの関わりは、父武が北海道の未開地に着目し1899年、投資目的で土地の貸下げを受けたことに始まります。1908年には農場の名義を受け継ぎ、小作人を雇う立場となりました。

小説「カインの末裔」はこの地が舞台です。農場の風景や働く人々の息遣いを巧みに表現し、武郎の代表作となりました。その一方で、自らを悩ませたのは小作人の困窮でした。生活を安定させるため、1922年には農場解放を宣言します。

小作人たちは農場を共有する農団を組織し、「相互扶助」の実践に取り組みました。戦後、農団は解散しますが、武郎への敬愛の念は消えず、有島謝恩会を結成します。同会は旧農場事務所を有島記念館とし、資料を展示保存してきました。

現在の記念館は1978年、ニセコ町が建設したものです。その後、この地を訪れる観光客の増加に伴い、町は周辺の土地2㍍を有島記念公園とし、記念館を含めた一帯を「有島文学の里」とする構想を描きます。

公園の計画は有島記念館の運営委員で札幌大学講師の高山亮二が中心となって練り、同じ運営委員の北海道大学工学部助教授、飯田勝幸が設計に携わりました。

工事は1987年8月、8千万円を投じて始まり、11月

に終了、1988年春に一般公開されました。しかし、設計段階から予定されていた、公園のシンボルとなるべき武郎の銅像はありませんでした。予算の手当てがつかなかったのでしょうか。そこで、建設の遅れを知ったニセコ第二有島農園が、制作費800万円の寄付を申し出ます。

ようやく動きだした銅像制作を担ったのは石川県金沢市在住の川岸要吉です。川岸は武郎が大学教授だった34～35歳ころの写真をもとに、構想を練り上げました。外とうをはおり、左手に本を抱え文学者のイメージを出し、右手は軽く上に上げることで農民への慈しみを表そうとしました。完成した銅像は高さ1.8メートル。1988年12月、公園内に設置されました。

銅像の除幕式は、記念館に隣接した有島カルチャーセンターの落成式と同じ1989年6月22日に実施。記念公園とカルチャーセンターのオープン記念式典も同日、町民センターで行われました。

公園内に配置された建造物は文学作品からヒントを得たものです。ブドウ柵は「一房の葡萄」、花時計は「星座」がモチーフになっています。また、入口の白樺並木は武郎が白樺派だったことを示しています。

そして、公園の中央付近にあるのが武郎像です。像を囲む泉は武郎の個人雑誌「泉」が元になっており、武郎のエネルギーがそこから湧き出るかのような印象を抱かせます。

設計した飯田は公園について「あらゆる分野の人々が、いろいろな形で、集い、新しい理想を模索し、その理想へむけて、遠く未来への生き方を指し示す長期



像の下から出た水は奥の水路に流れ落ちます

的ビジョンを思いきり語り合い、そこで、勇気を得て帰って行く、そんな『理想を語る聖地』であってほしい」と述べています。

残念ながら、ブドウ柵や花時計はその後、老朽化で撤去されました。ひと際目立つようになった武郎像は、理想を説く伝道者のような趣で立っています。

(敬称略、肩書は当時のもの)
=おわり=



有島武郎像。背後にそびえるのは羊蹄山

<参考文献>

- ・本郷新「春香だより」『月刊おたる』、1965年10月号
- ・浜林正夫「小林多喜二碑のこと」『北方文芸』、1968年3月号
- ・ニセコ町百年史編さん委員会「ニセコ町百年史 上巻、下巻」ニセコ町、2002年
- ・ニセコ町「広報ニセコ」ニセコ町、1987年9月号～1989年8月号
- ・飯田勝幸「ユートピアンの聖地として」『いま見直す有島武郎の軌跡』有島記念館、1998年